

【2014-06-15】 ブルー・ア
ルタイトルを一杯



b-svaha

宇宙船内部

船内には、噴水のある中央司令室の他に、六つの部屋があり、探査班、次元班、ロジスティック班、機械班、医療班、食糧班が、それぞれの部屋を専有していた。班には、リーダーが一人いた。中央司令室にはリーダーが三人いて、ルアはその一人だった。

2Fには個人用の寝室と大部屋があり、3Fには、食堂とラウンジ、最上階には、会議室と展望室があった。B1には、食料とエネルギー物資庫、B2には、保管庫、動力器機庫、修理庫があり、B3は、探査宇宙船の格納庫と発着口となっていた。

ルアは、各班のリーダーたちに私を紹介した後、宇宙船の統括リーダーであるアマデウスのところに私を連れていった。

「よく帰ってきてくれました。この日が来るのを、ずっと待ち望んでいましたよ...」

小柄ではあるが、背筋のまっすぐ伸びた初老に近いアマデウスは、立派な口髭を上に動かすように微笑んでそう言うと、両の掌で私の手をしっかりと包んだ。

その手のぬくもり、瞳の光は、永いこと離れていた家に帰ってきたような平安と安らぎに満ちていた。ハートが燃えるように暖かくなり、柄にもなく涙が出てしまった。

（ここは、ほんとうに、僕の故郷なのかもしれない...。

ただ、ずっと忘れていたのかもしれない...)

私は、アマデウスの手を強く握り返しながら、ただ何度も頷くしかできなかった。

「星までの旅を、ゆっくりと楽しんでくださいいね。何か望みがあれば、ルアか私に、いつでも遠慮せず相談するのですよ」

慈愛に満ちた眼差しで私を見上げ、彼は、最後にそう付け足した。

私は、彼に深々と一礼し、ルアとともに司令室を離れた。

後に、アマデウスには、中央の部屋にある噴水の仕組みについて尋ねてみた。

彼によれば、噴水は、アルタイルの太陽神殿の中心から湧き出る泉に繋がっているということだ。この宇宙船の製造時に、神官らが祭祀を行い、その聖水を船内に勧請したのだという。この話を聞きながら、日本の神道などにみられる祭神の分霊の仕方とよく似ていると思った。そのことをアマデウスに話すと、にっこりと頷き、

「そうですね。どこの宇宙でも、基本は、同じなのです」

と教えてくれた。

邂逅のラウンジ

この後、ルアと私は司令室にあるエレベーターに乗って、各フロアーの様子を見学して回った。

どれも印象深い光景ばかりだったが、詳細については、折に触れて書いていこうと思う。

私たちがこの宇宙船に搭乗してから、もう三時間は経過しただろうか。私の表情から察したのか、ルアは、ラウンジへと向かうエレベータに私を乗せると、

「少し休憩しようね」

と、言いながら、透明な円筒のエレベーターが向かう先を指差した。

ラウンジに着くと、そこには小さなカクテル・バーがあり、両性具有のヒューマノイド・バーテンダーが一人、給仕していた。体の右側が女性、左側が男性の造りだった。最初、横顔で見た私は、てっきり、美しい女性のバーテンがいると思ったほどだ。

ラウンジは、宇宙船を直径で別けた右半分を占め、円周に沿って、船外の宇宙がパノラマ状に観えていた。カクテル・バーは、宇宙船の中心から外側に向かう形で、小じんまりとした扇状に店を構えていた。

ルアは、ラウンジにあるゆったりとしたソファに私を座らせると、さらに奥の、円周で隠れて見えない先まで歩いて行き、一人の女性を伴って戻ってきた。

「紹介しよう。みどりさんだ...」

おもむろに、ルアは言った。

名前の通り、どこことなく日本人の風情がある、美しい和美人だ。

「は、初めまして。片山...。いいえ、アルといいます」

私は、ちらっと、ルアを横目で見てそう言った。

頬が紅潮するのが、自分でわかった。

「お久しぶりでございます...」

ちょっとおかしそうにそう言うと、その人は深々とお辞儀をした。

(はて...。どこかでお目にかかったことがあったかな?)

だとしたら失礼したが、会った記憶はないし...。それに、ここは、初めて来た宇宙船の中なのだし...。会ったとすれば、あの統括リーダーのように、過去世の僕を知っている方なのかもしれない)

ラウンジには、赤、青、縞めのうの円いテーブルがあり、人影はまばらだった。三人は、赤めのうのテーブルに席をとり、ゆったりとした椅子に腰かけた。椅子は、シルクによく似た肌触りの繊維で作られていた。

私は、みどりさんに、地球での自分の暮らしを思いつくままに話しながら、彼女の様子をうかがった。

(いったい、どうして日本人の名前なのだろうか?彼女も、僕のように日本から来たのだろうか?それとも、どこかほかの星の人なのだろうか?)

さまざまな疑問が頭の中を巡り、質問のきっかけがうまく掴めなかった。それでも、みどりさんは、私の目を真っ直ぐ見つめ、楽しそうにして話を聞いてくれた。

ルアは、そんな二人の様子を交互に見ながら、ただ黙って微笑んでいた。

やがて、頃合いをみるようにしてルアは立ち上がり、わたしたちをカクテル・バーに誘った。ルアは、私とみどりさんをカウンターの席に座らせると、何やらバーテンダーに言葉をかけ、「では、お二人して、しばらく寛いでいてくれたまえ。僕は小用ができたので、それを片づけてからまた合流するよ。

それから、飲み物は AG に頼んであるからご心配なく！」

と、横目で私を見ると楽しげに去って行った。

ルアが AG と呼んだバーテンダーは、小気味よいリズムでカクテルを調合すると、「わたしは、AG。あなた、ちょっといい男だから、いま女のわたしが反応しているの。

ブルー・アルタイルへようこそ、アル！」

と、微笑みながら、わたしたちにカクテルを差し出した。

それは、周囲に行くほど淡い青が深まり、グラスの真ん中には、柔らかい星のようなものが精妙な白い光を放っていた。

(これが、ブルー・アルタイル…。僕が聞いた、あの会話のカクテルか！)

私は、思わずカクテルを凝視した。

横に座ったみどりさんが、その様子を見守るかのように、こっちを見ているのがわかった。

カクテルを彼女の方に差し出し、

「素敵な出会いに…」

と言うと、

「素敵な未来に…」

と、彼女は応え、二つのグラスは小さなベルのような響きを立てた。

ひと口、口に含んだ。

柑橘系の淡い酸味と清涼感のある甘さが、絶妙のハーモニーを奏でる味わいだ。アルコールは、ほんの香り付け程度の微弱さだ。

星のように中央に漂う、白い発光体を飲んだ時のことだ。

食道から胃袋へと降りるはずの液体が、頭のとっぺんに、噴水のように吹き上げてくるのを感じた。眉間の辺りは、あたかも、誰かが陣太鼓でも乱打するかのように脈動し轟いている。

これ以上内圧が高まれば、頭蓋骨がお皿のように外れ、脳みそが噴出するのではと思った次の瞬間、何もかもが真っ白になり、一切の音が消え、すべての動きが止まった。

いや、すべてが消えてしまった…。

これまでの人生で感じたことのない、静けさ、平安が、私を包んでいた。

しばらくすると、さながら、母親の胎内で羊水に包まれて安らぐ胎児のような私の前に、巨大なスクリーンが現れ、複数の映像が、一遍に動き出した。

一つの映像に目を向けると、それが巨大化され映し出される。

地球上の、現在の私の映像もあれば、全く知らない惑星にいる私の映像もある。

想像したことも、聞いたこともないような生き物に追われて逃げ回る私もいれば、王冠を被り、きらびやかな衣装に包まれ玉座に君臨する女王の私もいた。物乞いをする私もいれば、樹木の私や動物の私、昆虫の私までいた。

不思議なことに、姿形はまったく異なれど、それらは全部私であることが、一瞬にしてわかるのだった。どの人生にも、始まりと終わりがあり、誕生と死があり、喜びがあり、悲しみがあつた。拡張があり、衰退があつた。それら一つ一つの人生は、不完全なように見えても、すべて完全だった。ストーリーとしては、完ぺきだったのだとわかつた。

こうして、いくつもの私自身の人生を、完全に第三者の視点で観賞するうちに、ある一つの映像にフォーカスがゆき、それが拡大された。

わたしたちは、出会ったころ、二人とも若かつた。

仲良くなり、愛し合い、結婚し、子供たちも二人生まれた。

下の子が十歳のとき、この銀河の果ての惑星がこれから大変な受難の時期を迎えるという、星の長老たちの話を聞き、志願してその星に赴いた。

二、三年で戻るつもりでいたが、その惑星での暮らしの中で、星のすべての記憶が埋没してしまつた。

転生を重ねれば重ねるほど、思い出すことは、苦痛で恐ろしいこととなつた。面倒で煩わしいこととなつた。肉体でのサバイバルに夢中になり、それしか目に入らなくなつていったのだ。

記憶を取り戻すことは、結局、不利にしかならないことと信じた。

私は、アルタイルを忘れ、子供たちを忘れ、みどりを忘れたのだ。

映像の再生は続き、父親を恋しがり泣く子どもたち、それを手繰り寄せるように抱きしめ、惑星のある方角の星空に向けて祈る、みどりのけな気な姿が映り過ぎた。

やがて、みどりは死に、子供たちも死に、別の体をとつて、それぞれに転生を続けた。

彼らの中の私は、徐々に忘れ去られ、記憶の彼方に消えていった。幾転生の持つ消去力の前には、個人の想いなど敵ではない。ただ、星に繋がることで、その記憶は、割合、永く保たれることがあるのだ。わたしたちの場合、それが、アルタイルだったわけだ。

私が赴いた惑星は、地球だった。

私は、ただ静かに、映像を見続けた。

次に私は、ルアにいる映像にフォーカスした。

ルアの横には、彼と瓜二つの私がいる。

私が志願して地球へ向かう頃に、ルアは、やはり自らの意思で、琴座のある星に向かつた。

そこから、地球に赴く仲間たちを支援するためだった。

この時期、実に多くの存在たちが、こうして地球に入植していたのだった。

ルアは、その星で現在の妻、リラに出会い、幾転生か、パートナーの関係を保つていた。

リラは、ベガの太陽神殿の巫女であり、みどりはリラの妹だった。

【2014-06-15】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/86850>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86850>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86850>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ